

## □ 書評 □

米本恭三, 他(編)

### リハビリテーションにおける評価 Ver.2

丸山仁司

(国際医療福祉大学理学療法学科)

評価とは、各機能の検査測定、患者、家族および環境などの情報収集・分析により、その人の全体像を把握すること、すなわち、統合・解釈することである。評価は、リハビリテーション医療において基本的で、しかも必須な部分である。リハビリテーションの分野では、評価に始まって、評価に終わるといわれているように、評価の重要性は、誰でも認知している。リハビリテーションの効果判定を科学的に証明し、より効果のある治療の選択、治療法の開発、すなわち、科学的根拠に基づいた治療である EBM (Evidence Based Medicine) が最近、叫ばれている。これらの効果判定で重要なことは、測定指標および評価表の選択である。このような時期に、本書が発行されたことは非常に有意義である。

本書は、平成 8 年 8 月に発行された「リハビリテーションにおける評価」の改訂第 2 版である。第 1 版では、症状別評価、疾患別評価の 2 部構成であったが、第 2 版では、体系化され、基本評価(7 項目)、障害評価(10 項目)、疾患評価(2 項目)、診断書記入のポイント

(6 項目)の 4 部で、計 33 項目で構成され、各専門家が執筆している。

本書の特徴として 3 点があげられる。第 1 点目の特徴は、オーソライズされた評価法の紹介である。評価方法は、多種多彩であることから、臨床で行う場合、評価法の選択に困惑が生じる場合がある。現時点でオーソライズされた(スタンダードな)評価法が紹介されていることは臨床上、非常に有意義である。2 点目の特徴は、構成の工夫として 4 部構成、特に、障害評価では、障害の全体像、障害の評価の内容、疾患評価では、疾患像、障害構造と評価の内容が簡潔に整理されていることである。3 点目の特徴は図表が多いため、理解しやすいことである。

本書は、リハビリテーション分野の共通言語を理解するために、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士、ソーシャルワーカー、臨床心理士、看護婦(士)、保健婦(士)などのリハビリテーション関連職種の本読書である。また、特に臨床実習を行う理学療法士、作業療法士の学生にとっては、虎の巻である。評価項目の選択、そして、その選択理由がわかりやすく、コンパクトに整理され、疾患も多く取り上げられているため、この 1 冊で全体像の把握が可能である。本書は、常に手元に置いておきたい書籍の 1 つである。

● B5 版 頁 392 2000 定価(本体 5,800 円+税)

医歯薬出版・刊